

令和3年度(2021年度)第1回 熊本博物館協議会 議事録

令和3年(2021年)7月30日(金) 10:00~11:50

於：熊本博物館 講堂

(出席者)

【委員】

阿部委員(会長)、岩崎委員(副会長)、島津委員、田中委員、内村委員、宮本委員、宮尾委員、金丸委員、福本委員、諏訪委員

【市】

田端館長ほか博物館職員

〈次第〉

- 1 開会
- 2 主催者挨拶
- 3 会長挨拶
- 4 議事
(1) 令和2年度(2020年度)事業報告について
- 5 その他
- 6 閉会

<議事>

【令和2年度(2020年度)事業報告について】

会 長：それでは次第に従いまして、まず一つ目の令和2年度事業報告について、事務局よりご説明をお願いします。

館 長：それでは令和2年度の事業報告につきまして、私から総括の説明をさせていただきます。その後、学芸班、総務企画班の各主幹・主査から個別の事業報告をさせていただきます。令和2年度は、本市にとりまして、震災復興のシンボルとなる熊本城天守閣や長塀の復旧など、震災からの復興が一段と進んだ年となりました。また、それと同時に、世界中で猛威を振るい続けている新型コロナウイルス感染症の対応に正面から向き合う年ともなりました。当館も、令和2年2月29日から5月20日まで、約3か月間の臨時休館を余儀なくされ、再開後も施設の消毒や来館者の健康チェックをはじめ、展示会・イベントの中止、さらには、講座・教室等の開催規模縮小など、感染拡大防止のための様々な対応を迫られることとなりました。特に行事関係の中止、延期につきましては、感染拡大の動向を見極めながらの判断となり、関係者との調整や協議など、職員にとって大きな負担となりました。そのような中、当館では、ご来館の叶わないお客様や、臨時休校となった子どもたちへの学習支援の取組といたしまして、自宅や自宅の庭などで体験できる学習コンテンツを、「熊博おうちミュージアム」と題して、館公式ホームページ上に紹介したほか、ツ

ツイッター、フェイスブック、インスタグラム、ユーチューブチャンネルを新たに開設するなど、SNS を活用した情報発信の強化に努めてまいりました。このように令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の対応に追われながらも、with コロナ、そして、after コロナ時代の到来に向けた今後の館運営の在り方を模索し、そして、新たな一步を踏み出す年ともなりました。

以上が私からの総括的な報告となります。

続きましては、各主幹・主査から個別の事業報告をさせていただきます。

— 学芸班主幹及び総務企画班主査より令和 2 年度事業報告について説明 —

会 長：ご意見、ご質問等がございましたらお願いしたいと思います。

委 員：いつも思うのですが、本当にいろんな取組が行われていることに、まず敬意を表したいと思います。去年は新型コロナウイルス感染症の影響により、いろんなものが制限され、長い時間とエネルギーをかけて準備してきたものが開催出来ない、あるいは開催しても途中で閉館せざるを得ないという中で、本当に奮闘されているなという思いをしております。なかでも大事だと思ったのは「震災をふりかえる —大地とモノが語る熊本地震—」と「がまだすドーム巡回展」です。当館も「地震から 5 年展」を実施したのですが、やはりだんだん（人々の記憶が）薄れてきているということで、毎年このようなりマインドというか教訓は実施していく必要がありますし、さらに普賢岳のことは、どんどん記憶から薄れてきているので、とても大事な取組だというふうに思いまして、それをきちっとされたというところは、すばらしいことだと思っております。それと、当館も熊本城域の施設として、博物館さんと連携しながら様々な事業を取り組ませていただいているのですが、やはり入場者は恐らくどこもそうなのでしょうけど、かなり減ってきていると思います。これは残念ながら、開館していてもやはりマインドは盛り上がりせず、厳しい状況だと思っております。また、いわゆる KPI、成果指標については、博物館がどのような指標になっているのかわからないのですが、入場者数のことだけを捉えたら、恐らく全国の博物館が厳しい状況になっていると思います。また何かアンケートなど、利用者の満足度みたいな、何かそのような指標もあるのかお尋ねできればと思っております。

館 長：まず、災害関係の企画展の開催についてお答えします。当館といたしましては、子どもにとって面白い、楽しい内容の企画展も大事だと考えておりますが、生活に密接した災害に関する展示会を開催することは、教育施設あるいは生涯学習施設として、非常に重要だと思っております。また、KPI（成果指標）についてのご質問がありましたが、行政として一番わかりやすい指標は入館者数です。ただし、コロナ禍において、入館者数だけで成果を判断するのは非常に厳しいところがありますので、私たちが入場者数以外で考えておりますのは、来館者が講座・教室、イベント等に参加されたときの満足度をしっかりと把握することがまず 1 点です。それからもう 1 点は、SNS を活用した広報活動に取り組んで

おりますので、どの程度の方がフォロワーとして登録していただいているのか、どの程度の方にアクセスをしていただいているのかということを経後の指標に加えていきたいと考えております。

委員：私は、もう 14 年前からずっと博物館がもっと活発になって欲しいということで、いろいろな角度で質問をさせていただきました。館報を見ていただくと、10 年前に比べてかなり活性化をして、だいた知名度も高まってきていると思います。広報活動にも力を入れていただいているのがありがたいなと思っている次第なのですが、コロナというところは差しおいて確認をしておきたいのが、様々な魅力的な展示会を企画し、一つ一つの展示会に関して、テレビやラジオの情報番組に対し、依頼をすれば無償で出る機会があると思いますが、この 1 年間どの程度働きかけをしたのかをお聞きしたいと思います。

館長：パブリシティー枠の活用というのは、私自身も非常に重要だというふうに認識しております。新聞のイベント開催情報欄や、フリーペーパー等にもイベント情報を掲載するなど、その他いろいろなパブリシティー枠がありますが、インターネット上のサイトも含め、可能な限り掲載の依頼をしております。しかしながら、今、委員がおっしゃったような、番組に職員が出向き、そこで広報するといったことまでは行っておりません。どちらかというと報道資料にリアクションのあったマスコミへの受け身の対応となっております。パブリシティー枠は、非常にコストパフォーマンスも優れており、私たち行政にとって非常に大きなメリットがありますので、今後もしっかり活用していきたいと思っております。

委員：以前より広報に力を入れるようお伝えしているのは、学校とかにチラシを配られています。これだけすばらしいものを持っていても知らなければ子どもたちや大学生は足を運ぶことがないわけです。博物館の有効活用のためには、職員がテレビに積極的に出演し、企画展を PR するような機会を増やし、博物館をさらに盛り上げていただきたいと思っております。

会長：私は島崎の美術館で 2 週間、昆虫コレクション展を実施したのですが、この間に 7 つのメディアに取材いただきました。口コミもあがり入場者数も増え、パブリシティーがとても大事なことだと思えました。報道の記者の方々と直接話をして依頼することで、次につながっていくのだと思っております。

委員：KPI についての関連ですが、館長より入館者数だけでなく、満足度を上げる方向で考えていくと話されましたが、その満足度をどうやって数値化するかは大変難しいと思っております。定量的に示すことが出来ないのも、アンケート調査の集計や分析の手法がいろいろありますが、どのように集計・分析するかが重要だと思っております。館内を見られた後の 1 回だけのアンケート調査では、なかなか見えにくいところがあり、本来であれば少しの時間で継続的にやれるようなアンケートがあると、もっと良いのだろうと思っております。次に、マスコミ

に積極的に出たらとありましたが、興味関心を喚起するのと同時に、やはり入館者数を増やすという意図があると思います。そういう意味では、ここ博物館の入館者の中の半数以上の方が、プラネタリウムを利用されているということは、成果も上がっていると思います。地域の総合的な博物館という面から、長期的な教育普及を考えると、地道な活動をこそ評価していただきたいと思います。大規模な展覧会ならマスコミにも出やすいと思いますが、日頃からの調査研究や資料収集は目立たないですが、そこが博物館の一番の質的な部分を担保していると思います。

そこで質問ですが、資料収集の収蔵品の点数についてお聞きします。

総合博物館ということで様々な分野での資料がありますが、とりわけの動物が多いのはどうしてなのか、また、理工が少ないのはどうしてか聞かせていただきたいと思います。

事務局：動物の資料が多いのは、動物担当の学芸員が採集していること、また、寄贈も多いことが挙げられます。次に、理工の資料が少ないのは、現在、積極的に資料の収集を行っていないためです。理工の補足ですが、博物館のリニューアル前は、かなりのスペースを取り、吹き抜けの空間にたくさんの理工展示物がありました。その時は、まだ点数が多くなりましたが、リニューアルに際し、理工については展示から実験工作室を利用する体験型へと移行しました。その際、理工の展示物は寄贈先への返却や、教育機関へ寄贈するなどしました。現在、理工展示室及び収蔵室はありませんので、収集活動を控えている形になっています。

委員：生物については、寄贈の中にキノコ標本 675 点とかありますが、やっぱり多いのだろうなということはわかりました。リニューアルの方針で理工分野は収蔵品を減らし、体験型とする方向性はわかりましたが、今後そのようなことを見直すことはあるのでしょうか。

事務局：博物館としての基本的な博物館のあるべき姿勢としては、全ての資料を積極的に収集するという、理想を言えばそうなると思うのですが、理工の資料はかさばるものが非常に多く、場所をとるものが多いので、現在の博物館の収蔵庫の現状を考えると、理工の分野に関しては積極的には収集出来ないと考えております。また、昆虫などのかさばらない小さいものに関しては、これまでどおり収集しておりますが、収蔵環境が改善すれば、今後、理工資料も増えていくかもしれないという状況です。

委員：大変よくわかりました。いろんな博物館のテーマとかキャラクターなどがある中で、歴史系、民俗系、地域に根差したものを考えておられるということなのだろうと思います。一方で、これは、この博物館に関してではないのかもしれませんが、熊本には科学館とか科学博物館というのが無いということもやはり背景にありますので、県と市で検討されることかもしれませんが、ちょっと寂しい面もあります。

会長：展示で理工の部分が大幅に削られて無くなっているというのは事実ですね。それに代わ

るように、実験工作室や補助講座等を含めての活用ということでお願いをしてまいりました。やはり、熊本市としての理工を中心とする博物館というのがちょっと見当たらないというのが現状なのです。博物館では夏休みに科学展が実施されていましたが、それも今のところ出来てない状況もありますので、リニューアル前から比べると、その部分が見えていないとの印象を持っております。研究と同じで、収集も基本的にスパイラル状で、目的を持ってやっていくというのが基本です。いろんな目新しいもの、あるいは目立つものを集めていくというやり方もありますが、やはり、展示に生かす、あるいは教育を行うという目的を持って集めていくということは、これはニーズに合う大切なことだと思います。例えば民俗を例にとると、生活用具の便利さを追求していくというのが当時は最先端のものであって、現在からみると民俗として残っていく部分が多々あると思います。衣装、料理器具もそうです。恐らく、現在の理工の部分で時代を経れば、当然大事になっていく部分があるはずだと思います。私が大学の2年のときにパソコンが入りました。ワードスターというソフトで論文を作りました。それから徐々に変化をして、今は、スマホの時代ですけども、また、今後も変わっていくと思います。親たちは知っているが子供たちは知らない世界というのが広がっているわけです。その過程でやはり、教えていけないものは当然出てくるわけですから、目的を持って理工の分野でも資料を集めていただくというのは筋論だと思います。是非、ご検討いただければと思います。ただ、以前の展示コーナーも含めて、かさばるものは多かったですね。しかしながら、スペースはどこかに見つけないといけません。この館内だけで収まるものではないと思いますので、是非、今後の課題としてご検討いただければと思います。理工として必要な部分も是非、集めていただきたいというスタンスでお願いできればと思います。

委員：お二人の話を聞きながら思ったのですが、いろんなところから各分野の寄贈の申し出があると思います。当然、収蔵庫にはキャパシティがあり、不足していく状況になると思います。私たちの美術館でも収集の方針を作り、収集委員会に諮って、収集方針に合わないものはお断りするなどの判断をしています。博物館では寄贈の申し出がいっぱいあると思いますが、収集の方針的なものはどのようになっているのでしょうか。

事務局：各分野である程度、収集方針というものを定めています。基本的に判断できるのはその分野の専門の学芸員ですが、隣接する分野に諮り、それが物理的に収集保管可能なのかどうかも含めて検討します。その後、館長、補佐を含めた館内の主要メンバーで受け入れ検討委員会を開き、受け入れの可否を決定しております。

館長：補足させていただきます。事務局から説明しましたとおり、寄贈の申し出があったときには、まず学芸員が館の収蔵品として必要なものかどうかを判断します。最終的には館内で検討会を実施し、最終的に私の判断で受け入れるかどうかを決めております。地震や水害等の災害により、各ご家庭では保管するのが難しくなっているケースが増えており、寄贈の申し出が多くなってきております。寄贈の申し出に関しましては、かなり絞り込んだう

えで受け入れている状況です。実際、訪問して現物を見せていただき、確認をしたうえで、慎重に受け入れを行うという形をとっています。また、寄贈とは別に寄託というのもあります。寄託は、所有権が移動しない、本人が所有権を維持しながら、博物館に一時的にお預けいただくというようなものもありますが、収蔵庫のスペースもあり、なかなか寄託を受けるのが難しい状況です。資料の受け入れにつきましては、内規の取扱要綱に基づいて事務手続をとっています。

会 長：例えば、寄贈を受け入れることが分野的に難しいとなった場合や、スペース的に難しいといった場合には、熊本県博物館ネットワークセンターや他の館に斡旋したりはしているのですか。

事 務 局：もちろんその様な対応もしております。熊本県博物館ネットワークセンター、近隣の館や他県の博物館を紹介させていただいたりすることも多々あります。なるべく資料は無駄にはしたくないので、その資料を残すためにどのようなことが出来るかを模索し、廃棄にならないよう努めています。

会 長：スミソニアンにはメリーランド州の郊外にミュージアムサポートセンターというのがあって、フットボール競技場が入る大きな建物が4つあります。スミソニアン博物館の資料は全部そこに収められサポートされており、そういう仕組みが出来あがっています。それが念頭にあり、熊本県ネットワークセンターもそのような形で機能出来ないかと申し上げた経緯があります。今後、20年間のうちに自治体の変動が出て来た時に、特にしわ寄せがくるのが教育文化分野だと思います。資料収蔵をサポートしていく仕組みについて、熊本市も熊本県博物館ネットワークセンターと連携し、施設の共有化を図ることが出来ればと思います。それが出来れば熊本博物館のスペースも確保される。そして、保存や研究活動についても一緒にやっていくような仕組みが、これから問われてくると思います。

委 員：収蔵資料は減ることはありません。これからも増えていくと思います。当たり前のことですよね。熊本県博物館ネットワークセンターも登録していない物を含めると67万点ぐらいあります。入りきれない状態のため、新規の受け入れは原則していません。毎年多くの方から寄贈の依頼があるため、こちらの判断基準に基づいて受け入れをしております。収蔵のスペースをどうしていくかというのは、どこの博物館も課題だと思います。今後は廃校とかを利用するなどの案を考えていかないと限界が見えてきている状況にあります。

館 長：館内で収蔵スペースを作るとなると極めて厳しいものがあります。熊本市では施設マネジメント計画があり、今ある施設を有効に活用するというを進めております。博物館の収蔵品は、温度や湿度など、収蔵品に応じた保存環境の確保が重要でありますので、比較的湿度や温度管理が必要ない収蔵品の置き場については、状況に応じて熊本市の施設の中

で活用できるところがあれば検討していきたいと思います。

委員：門戸の開かれた博物館という観点から一言申し上げたいと思います。16 ページに書いてありますように、聴覚障がい者のための生活文化講座やプラネタリウムの字幕投映など、障がいをお持ちの方への配慮は大変良いことだと思っております。視覚に障がいをお持ちの方は、「博物館は緑のないところだ、行っても何もわからない」という感情を持ちの方も多いと思います。例えば、特殊な結晶の形の鉱物、化石、土器の破片、葉っぱの形の違いなど、いろんなものに触って体験していただく場があるといいと思いました。

事務局：これまでも盲学校での依頼により講座を実施したことがあります。その時は、特徴的な鹿の頭の剥製や手触りの特徴的なモグラの剥製を触ってもらいながら話をしました。今後、積極的に様々な方が楽しむことが出来るメニューを打ち出していくため、学芸班で検討していきたいと思います。

館長：昨年、10月に文化庁主催の館長研修の中で、視覚障害者専門の博物館からの発表がありました。そこは、全く目が見えない方が触って体験できる施設で、視覚に障がいの方は普段そのような機会がないので、特に熱心に触って帰られるということをお聞きしました。我が館に帰って来て見たところ一部触れることができるものはありますが、折しも新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、収蔵品に触るということが難しい状況でした。今後、新型コロナウイルス感染症が収束した際には、触って体験できる展示を増やせたらと思っております。すぐには難しいかもしれませんが、学芸班と共に取り組んでまいりたいと思います。

事務局：今でも地質の展示物に触れられるものはありますが、まだ少ない状況です。ただ、特別支援学級の児童や放課後デイサービスの子供たちに対し、「子ども科学・ものづくり教室」でのものづくりを追体験してもらうなどの対応はしています。現在、できている部分もありますので、今後は積極的に身体的な障がいをお持ちの方へのサポートを工夫し、少しずつ対応できるところから幅を広げていけたらと思っております。また、熊本県博物館ネットワークセンターが中心になって「博物館のための教員の日」を毎年行っておりますが、そういう場で先生を介してできることを提案していきたいと考えています。参加された先生方から子どもたちに還元してもらおう流れができればと思っております。

委員：学校現場からですが、積極的なアピールを是非ともお願いしたいと思っております。この事業報告を見ますとイベントや教育支援など、すばらしい内容ですが、現場の職員や子どもたちにはあまり周知をされていないと感じます。校長会にも来て情報共有をしていただいておりますが、なかなか広がっていない状況です。熊本市では、このコロナ禍の中、子どもたちが1人1台のタブレットを持っています。これを使って子どもたちはいろんな情報収集をしておりますので、逆に博物館の優位性はたくさんあると思います。実物を見ることのわくわく感や良さなど、博物館ならではの強みをもっとアピールした方がよいと思

います。また、実際に博物館に来て子どもたちに学んでもらうために、館内のコロナ対策や、収容人数等を伝えることが大事だと思います。熊本城見学と博物館で1日弱ぐらいの見学旅行ができるのではないかと思います。コロナ禍にあり、学校現場も行事をどう実施するのか悩んでいる状況がありますので、博物館からの対策も含めた、実際の見学の形を一緒に示していただければ先生方も博物館を利用しやすいと感じました。

事務局：現在、タブレットには博物館のキャラクター「しゃちべえ」のアイコンを表示し、博物館HPが見られるようにしてあります。また、教育センターのHPには「博物館の自然観察・科学工作のすすめ」のリンク先を表示しています。周知が足りないというご意見ですので、今後もアピールを強化していきたいと思います。館内での体験学習メニューにつきましては、例えばスクールシャトルバス事業の際には、プラネタリウムをまず観覧し、館内学習プログラムの中から選んでもらった学習活動（座学）を行い、それから展示室を見るというような4時間ほどのプログラムを実際に行っています。そのようなものを紹介させていただき、是非、子供たちに来てもらえるようになるとありがたいと思っています。

委員：直接的に今回の事業報告と関係ないかもしれませんが、文化庁から博物館法の改正ということで、国からいろいろ来ていると思います。今日、資料の散逸を防ぐために1か所に集めるという話がありましたが、そもそも資料はあるべきところにあるべきです。今、博物館ではないところを博物館にし、底上げしてちゃんと博物館としての位置づけをしてあげたうえで、盛り立ててサポートし、全体としてどうしていくかというような話があるところです。もう一つは小さい館が多いので、自助努力だけではなかなか運営が厳しいということでネットワークの話があるわけです。拠点施設がそういうところをサポートしていこうという話で、熊本においてはやはり、この熊本博物館と熊本県博物館ネットワークセンターがサポートしていくのであろうと思うのです。何かその辺のところで、情報共有していただけることがあれば、お願いしたいと思います。

館長：熊本県は熊本県博物館協議会というのがあり、熊本県博物館ネットワークセンターが事務局を担当されておりますが、是非、私たちの方からも働きかけを行い、引き続き情報共有を図り、この熊本博物館だけではなくて、県全体でネットワークを組んで連携できることを模索していきたいと思います。

委員：現在、学校では1人1台のタブレットがあり、コロナ禍というのもあるのですが、見学旅行とかも中止だったり、規模が縮小されたりしておりますので、PTAとしても何か子供たちに楽しい思い出を作ってあげたいと日々模索しております。やはり、タブレットというのは必要不可欠なもので、子どもたちのためにリモートで何かしてあげようとか考えます。やはりリアルタイムというのが1番楽しいのかなと思います。直接見たり触れたりとかするのはできないのですが、リモートライブで見学旅行をしていただけたらいいなと思いました。常に博物館に足を運ぶというのは難しく、行く子は何回も繰り返して行くと思

うのですが、行かない子は全く行かないと思うのですよね。もっとまんべんなく行けるような、何か楽しいことを企画していただけたらいいなと思います。保護者が行かないと小学生は自分の力では行けませんが、子どもたちが保護者に「行きたい」って言ったら、忙しい保護者も連れて行ってあげたいと思うので、やっぱり子どもたちにまず身近に博物館というものを感じてもらい。そのためにはやはり、いろんな授業の一環としてのリモート授業など、そういうのもあっていいのかなというふうに思います。

事務局：博物館でのリモート授業は、もう実際に行っております。これも全学校の先生方が博物館が実施していることを把握されているかはわからないのですが、一部の学校からは割と頻繁に要望があり、実際に約1時間、博物館の学芸員が資料を手を持って完全なリモートの授業を実施しております。利用いただいている学校は、博物館を比較的身近に感じていただけているのではないかと考えております。

館長：昨年度から新たにズームを活用した遠隔授業の取組を始めておりますので、今後も学校からの要請に応じ、積極的に拡大していきたいと考えております。また、校長・園長会が定期的に開催されておりますが、その中でもズーム授業の活用について広報しております。それから定期的に子どもたちに博物館へ足を運んでもらうということに関しては、私が冒頭で災害に関する展示会が大事だという話をしましたが、一方では本当に子どもたちが博物館へ行きたいと思ってくれるような楽しい企画も大事だと思っております。プラネタリウムの観覧者がとても多いので、プラネタリウムの投映や魅力的な企画展などを開催することが、子どもたちの足を博物館に向かわせるための大事なPRになるのかなと思います。今後もコロナ渦の中で、いろいろ難しい面はありますが、子どもたちへ向けた取組を積極的に行っていきたいと考えております。

事務局：お子さんが保護者を連れて来るという話がありましたが、博物館もそのようなところを重視しております。「くまはくミュージアムパス」というカードを4月に市内の小中学校の児童さん生徒さんにお渡し、それを持って来ていただければ博物館に無料で入れるというようなPRをしております。これまで「これがあったので来ました」という声もありましたので、このような取組を続けていきたいと考えております。また、学級活動であったり、児童館だったり、町内の活動であったり、そのようなところの団体の受け入れもしておりますので、今後もPRしていきたいと思っております。

委員：教育普及活動にすごく力を入れていらっしゃるということで、博物館活動の中でも派生的な仕事、教育普及活動、そして、学習支援とか、その辺りも14ページから17ページまで、いろいろ挙がっております。これだけの内容は非常に重要なことなのですが、職員のマンパワーが、これだけのことをやっていく中で大丈夫なのでしょうか。そして、

人的にこれらをちゃんと行っていけるのか、その辺り苦労されているところじゃないかなど、ちょっと確認しておきたいと思いました。

館長：私の方からマンパワーが無理をしているというのは申し上げにくいのですが、改めて事業報告で1年間を振り返ってみますと、手前味噌ながらうちの職員は本当によく頑張っているなと思います。もっと多くの職員を配置できれば良いのですが、現状としてそれは難しい状況です。そのような中、リニューアルオープン後は、来館者数を成果指標としていたこともあり、多くのお客様にご来館いただけるようなイベントを数多く開催して来たことは事実です。一方、それがあまり行き過ぎますと、本来、学芸員がすべき調査・研究でありますとか、先ほどお話があった資料登録でありますとか、そういったところがおそろかになることもあるわけです。その辺りはリニューアルして3年目になりますので、振り返りをしながら、館運営全体のマネジメントを行っていきたいと思っております。また、数多くの講座、教室、イベントを実施するうえで、市民ボランティアを活用していくということは一つの大きな課題だと思っております。これにつきましては、引き続き実現に向けた取組を進めていきたいと思っております。

会長：令和2年度の開館日数は何日ですか。

館長：開館日数については、今、手元に数字が無いのですが、基本的には年末年始、12月29日から1月の3日までと毎週月曜日が定例の休館日となっております。

会長：やはり全博協の調査でも、皆さんの教育委員会、県の教育委員会の調査でも、項目としては必要になります。この開館日数というのが、ある意味ではKPIの母数になりますので、次回からこの報告の中にはきちんと項目立てて入れていただくといいかなと思います。それから、8ページの「夏休みの自由研究相談会」の参加者12人の内訳について情報をいただければありがたいのですが。また何日に初めて何日に終わりましたか。

事務局：今回、高校生の相談は無かったのですが、小学生と中学生からの相談がありました。内訳に関しては記載しておりませんでした。分野としては、動物、植物、地質、理工の4つの分野となります。去年はコロナ禍のため、夏休み期間中、随時受付をして個別に対応しましたが、今年は夏休みの前半に1日、後半に1日設定して行いました。

会長：受入れの最初日と受入れの最後日を入れていただくと良いかと思えます。それと、ちょっとKPIのところでは話のあった中で、マーケット調査用のアンケートと満足度のアンケートではちょっと違って来る部分が当然出てきます。そこは十分ご留意いただいて、アンケートをきちんとやっていただくといいのかなと思います。それと今、教育の質の保障ということで、大学は令和2年から動いており、恐らく小中高はもう先に動いていると思えますけれども、評価・点検の仕組み作りというのは遠隔（オンライン授業）の中でも出てき

ています。受ける側の情報を常に得られるような双方向での評価の点検の仕組み作りが求められています。これから博物館にもそのような動きが出てくるのではないかと思いますね。

会長：よろしいでしょうか。ほかにご質問、ご意見はございませんでしょうか。令和2年度の事業報告については、これでよろしいでしょうか。
ありがとうございます。

会長：これで、本日予定しておりました議事を終了したいと思います。
それでは進行を司会の方にお渡しします。
委員の皆様、ご協力ありがとうございました。

— 閉 会 —